

第8回研究大会若手シンポジウム報告： 〈老い〉を考える—近代化・自立・尊厳 Young Symposium: Thinking of "Aging"

〈老い〉への考察をとおしてみえてきたオルタナティブな未来 Outlook for An Alternative Future by Thinking of "Aging"

澤 佳成

SAWA, Yoshinari

はじめに

若手シンポジウムは、学会の活性化を図って設置された。若手会員が集い、企画の立案を手掛けてテーマを決め、そのテーマの議論に必要な視点を誰が報告するか決定し、大会まで数度の研究会を重ねて報告案を練り直す。そのような流れの中で決定・議論された「〈老い〉を考える—近代化・自立・尊厳」というテーマのもと、第8回大会（2013年6月）において初の若手シンポが開催された。

フロアから、「認知症になったとしても、突然すべてを忘れるわけではないのに、馴染みの店の店員も、とたんに子ども扱いし始める」、「老いたからといって悲観などしていないし、毎日が楽しくて仕方がない」といった実体験からの貴重な御意見も提起され、活発な議論が交わされた。

本特集の三論文は、若手シンポでの議論をふまえて各報告者が編んだ論考をもちより、それを元に数度の研究会を開いてさらに意見交換を重ねるという、努力の結晶ともいうべきものである。

ここでは、当日司会を務めた筆者が、各論文の連関からみた本特集の意義について記してみたい。

〈老い〉というテーマ設定の理由

テーマを決定する議論の際、一貫して報告者に共通していたのは、「けっして否定的なものではないはずの〈老い〉が、少子高齢化問題など、社会的にネガティブなものとして受け取られているのはなぜだろうか」という思いである。そこから議論は始まり、〈老い〉を中心としたテーマを設定する方向になった。そうすると、〈老い〉が社会的にネガティブなものとする要因は一体どこに潜んでいるのか、まず明らかにしなければならない。

議論の結果、その主要因のひとつとして、「近代化」がキーワードになるのではないかという結論に至った。そこで、三論考で取り上げられている近代化の問題と〈老い〉との関係についてみておこう。

近代化は、物理的な豊かさをもたらし、人間の生の期間を飛躍的に長くした。その結果、人間に特徴的な老齢期を多くの人びとが享受しうる時代がやってきた。だが、その反面において、それまで特殊な事例として尊崇の対象だった〈老い〉は、その地位を失ってゆく。そのうえ〈老い〉は、「定年退職」という制度によって、市場経済における賃労働から

人びとを排除する有力な理由となっている。この現実、働けなくなる時期としての〈老い〉を、若者が忌避する傾向を生み出してきたのではないか。この現象は、「豊かさ」を追い求めてきた近代化の負の側面だといえるのではないか。大倉論文は以上のように近代化と〈老い〉との関係を分析する。

そうした〈老い〉特有の疎外をもたらした近代化は、一方で、私たちの権利を確立させてきた肯定的側面も併せもっている。人間が、特定の権力者や他者から干渉されずに、自らの意思によって、すなわち自己決定によって自らの行為を選択できるようになった点は、人間の権利の核心部分をなしている。

だが、それゆえに、人間の死は、はたして本人の自己決定だけに委ねられてよいのかという重大な問題が生じてしまった。若くて元気なとき、たとえば〈老い〉で病気で動けなくなった場合の「尊厳死」を希望していたとしても、いざそうしたときが訪れた場合には、やはり死を回避したくなくなるかもしれない。だがその際、当の本人が、他者に向かって意思表示できない状態に陥っていたらどうなるのか。近藤論文は、いのちの存続の可否までも個人の意思決定に委ねる際に生じてしまう、このような近代化の結果としての矛盾を指摘する。

高橋論文は、日本に足りないのは、この社会に生きる一人ひとりの人間が語れる場であるとする。とくに高齢者の語りは「説教」として受け取られがちだが、その理由は、近代化を経た日本社会が、市場経済的な価値にからめとられてしまっているからだ」と指摘する。なぜなら、経済的な価値の創出に寄与しない語りは、社会から排除されてしまうからだ。

このように、〈老い〉に焦点を当てて人間と社会との現代的な関係性を探ると、近代化を経たこの社会の矛盾に突き当たりそうだと分かってきた。

〈老い〉の諸問題と「語り」

では、一体どうすればよいのか。私は、高橋論文の指摘する「語り」が、三論考の指摘する問題点を解決しようとする際のヒントになるのではないかと、また、オルタナティブな社会を考える上での重要な示唆を与えてくれるのではないかと考える。

そこでまず、高橋論文が提起する、世代を超えた語りの交錯する社会の概略を示しておこう。

語るという行為は、自らの生を意味づける行為であると同時に、過去を振り返るものでもあるがゆえに、人生における「傷」と向き合わなければならない、なかなか難しい営みである。だが、このような「語り」が一般化してゆけば、過去の社会的な出来事までもが、諸個人の語りを通じて相対化されてゆき、社会のなかで抑圧されてきた側面に共通する視点が照射されはじめるだろう。そうなれば、歴史を紡ぐ営みのあらたな展開もまた、期待されることになる。

そうしたあらたな営みのなかでも、年長者は特別な役割が期待される。なぜなら、現生世代のなかで、自らを苦しめてきた社会のあらゆる矛盾の記憶を多く秘めているのが、年長者であるからだ。だから、年長者がそうした語りをはじめることができれば、世代を超えて関係する社会的な矛盾も詳らかになり、人びとの目も自然とそちらに向いてゆくだろう。

こうした営みが可能になれば、今を生きる老（年）・壮（年）・青（年）それぞれの世代が、この社会の矛盾を照射するゆえに重要な出来事であるにもかかわらず、語り難いものとして内面化してしまってきた「戦争」、「学生運動」、「いじめ」といった体験について語りはじめることができるようになるのではないかと。その結果、世代を超えた語りの交錯から、過去をみつめ、反省すべき点をあぶりだし、未来に生かしてゆく営みが可能な社会へと、転換し

うるのではないか。

ではなぜ、高橋論文のこの視座が、三論文を貫くヒントになると考えられるのか。

まず、大倉論文は、こうした「語り」の可能な社会を実現する具体的な構想を述べているように思う。それは、労働のあり方の転換である。

賃労働にからめとられてしまっているからこそ、若者は今、冷戦終結以降ますます激化している資本主義経済システムの駆動する力に必死にしがみつこうとし、自らがそこから蹴落とされる未来を暗示する〈古い〉を忌避している。

もしそういえるのであれば、〈古い〉た人びとも働くことのできる社会に、すなわち、賃労働だけに縛られない重層的な働き方を許容しうる社会に転換してゆく必要がある……。

大倉論文が重要だと指摘するそのような未来社会においては、〈古い〉た人びとの経験や技術が、人びとが生きるうえでのあらゆる局面で重宝されると考えられるが、そうしたものの伝承において重要になってくるのが、〈古い〉た人びとの「語り」に他ならないと思われるのである。

では近藤論文は、世代を超えた「語り」とどのようにつながってくるのだろうか。

大倉論文が重要だと指摘する、〈古い〉た人びとが生き生きと暮らせる社会になったとしても、死は確実に、誰にたいしても訪れる。だが、先にふれたように、近代化された現代社会での人の死は、「尊厳死」や「安楽死」といったかたちで、過度に本人の自己決定に依存する方向に舵を切りつつある。

だが、植物状態になった人間の意思が、健康状態にあったときと同じであるとは限らない。だから、健康な状態にあったときの意思を尊重し、尊厳死や安楽死を周囲の人間が容認したとしても、それは当

人の現在の福利に反する事態にもなりうる。それゆえ過度に自己決定に依存する人の死の決定は、必ずしも正当化されえない。ひとりの人間の死は、もつと人びとの間の関係性から問い直されるべきである。

近藤論文はこのように指摘するのだが、死をめぐる人びとの関係性においても、世代を超えた語りは重要になってくるように思われる。

〈古い〉た人の死が迫っているとき、当人の思いや気持ちを理解するには、若い世代の判断だけでなく、当人と同じ時代を生きてきた世代の、家族を超えた人間関係を含めての「語り」が重要になってくるように思うのである。そうした語りを経れば、当人が元気だった頃の〈生の重層性〉、すなわち、社会や他者との関係性、他者による当人へのまなざしといったものと、意思をもった一個の人間としての生との重層性が浮き彫りになり、自己決定に過度に依存する死のおかしさが感じられると思うのだ。

まとめよう。大倉論文が指摘するように、〈古い〉ても働けるということを共有し、その視点から多様な働き方を許容しうる社会へと転換すること。そのためには、高橋論文の照射する「語り」を欠くことはできない。

また、近藤論文が喝破する、死の自己決定を人びとの間の関係性から問い直すべきだという視点は、高橋論文がその重要性を指摘する「語り」によって、人の死の内実を議論することによってこそ、解決の萌芽を獲得しうる。

このように、現代社会を取り巻く矛盾とその解決の方向性を示している大倉論文と近藤論文両者を貫くのは、社会の矛盾を浮き彫りにし、オルタナティブなあり方を構想する際に必要な「語り」、すなわち、高橋論文が重視する視点の、オルタナティブな社会での有効性の提起ではないかと思うのである。

オルタナティブな社会の可能性と「語り」

現代社会の問題点の把握においても、オルタナティブな社会のあり方の模索においても、世代を超えた「語り」が重要である。三者の主張の交錯の結果みえてきたこの視点から、三者の議論をまとめつつ、本特集の意義と今後の課題を述べたいと思う。

働けなくなる〈老い〉を忌避し、〈老い〉てからの死を過度に自己決定に委ねようとする現代社会。そのように〈老い〉が忌避される社会状況が生まれたのは、誰にだって訪れる「死」についての議論までもが忌避された結果であろう。物事の本質を問う営みが忌避される傾向は、この社会が、公害問題の根本的な解決を図れないまま 3.11 福島原発事故を迎える要因とも共通しているように思われる。物事の本質を問うより、表面的なつながりが重宝されるのも、社会の矛盾がなかなか解消されずに同じような失敗を繰り返すのも、結局は、世代を超えたつながりが薄いからではないかと考えられる。

そうであるなら、労働のあり方を変え、近代契約論的な死の肯定がもてはやされる風潮を問い直すためにも、世代を超えた「語り」の交錯する社会を築いてゆくべきなのだろう。

現時点での諸課題を乗り越え、オルタナティブなあり方を模索していくため、人間のつながり（共同性）を復権してゆくには、世代を超えた「語り」が欠かせない。そして、そうした営みの可能な社会を築いてゆく実践を欠くこともできない。これらの点が、三論文の関係性からみえてくる、とりあえずの結論のひとつである。

もちろん、議論は緒に就いたばかりで、今後深めていかなければならない論点はまだまだたくさんある。読者の皆さまから忌憚のない御意見を頂戴できれば幸いである。

※追記

本稿の「〈老い〉た人びと」という表現に違和感を持たれた方もいらっしゃると思うので、この点について理由を記しておきたい。

本特集をまとめる会議において、「老人」「お年寄り」「高齢者」といった言葉の響きの裏にある違和感が話題となった。これらの言葉には、年を重ねて少し体力が低下しただけの人びとを、何か特別な存在としてひとくくりにする効果を与えてしまっている印象がぬぐえないという話になったのである。そうであるなら、いっそのこと、こうした言葉をなるべく使わないようにした方がよいのではないか。

そうした議論を経ていたために、本稿では、報告されたお三方の意向を組み、「〈老い〉た人びと」という表記を用いた。これには、老若男女を問わず、肉体的に老いているかどうかに関係なく、働く仲間として、人間の死の意味を考えさせてくれる人間として、語りあう仲間として対等な関係にある存在という意味を込めている。

とてもそうした意味を込めるのに成功した表現だとはいえないけれども、このような背景があるのを御了承頂き、今後の表現方法についての御意見も拝聴できれば幸いである。

澤 佳成（東京農工大学大学院農学研究院講師）